『人類学研究所 研究論集』第 7 号（2019）
Research Papers of the Anthropological Institute Vol.7 (2019)

フェズ世界神聖音楽祭の都市空間性
――〈ホーム〉をめぐる音楽と共感の諸相――

野澤　暁子

キーワード
反戦、多文化主義、音楽フェスティバル、場、共感

１．序

P. Norra が発した「記憶の場」をめぐる一連の論考（e.g. Norra 1984=2002）を先駆けに、客体的事実としての歴史論から集合的記憶を構築する物語としての歴史論への転換がさまざまな領域で展開している。この潮流をふまえ、本稿はモロッコ王国のフェズ市[1]（英語: Fes, Fez／仏語: Fès／アラビア語: فاس／ベルベル語: Fas）で開催されるフェズ世界神聖音楽祭（Fes Festival of World Sacred Festival）を事例にとりあげ、パフォーマンス研究の視点から音楽体験を介した複合的な民族的・宗教的紐帯の関係性を論じる。

まず特筆すべきは、20 世紀末の社会状況を集約したこの祭典の性質である。これは 1990 年開始の湾岸戦争への反動から、モロッコの文化人類学者 Faouzi Skali がアブラハム的信仰（キリスト教、イスラーム教、ユダヤ教）の共存を理念に立ち上げた、毎年 6 月後半の約一週間開催される国際音楽祭である。この行事は観光産業を組み込みながら毎年延べ 10 万人以上を集客する規模[2]に発展したものの（Fes Festival 2018）、音楽のための音楽フェスティバルというより、その求心力はむしろ民族や信仰の過去を訪ねる巡礼性である。インターネットによる超地域的な発信を通じて世界規模の参加を呼びかけるメディア的手法から、これは高度情報化社会の祭りであるともいえる。さらに今世紀に入り、世界規模での宗教対立の深刻化とともに同種の祭典が先進国を中心に増加した。フェズ世界神聖音楽祭はこの約 20 年間の世界情勢と連動しながら、一つの潮流を生んだのである。

フェズ世界神聖音楽祭については、開催地モロッコの宗教的背景と湾岸戦争を契機とした成立背景から、ムスリム主導の国際平和行事としての印象が強く、実際のプログラムもイスラーム音楽に関係した演目が多数を占める。M. F. Curtis の先行研究が焦点とするのも、この祭典におけるスーフィズムの連帯である（Curtis 2007）。Curtis の視点は、米国からのボランティア・スタッフとしての参与観察をベースに、ソルボンヌ大学にてスーフィズム研

[1] 日本語でこの地名は「フェズ」「フェス」という二つのカタカナ表記があるが、本稿では一般的に流通するフェスティバルの略称（フェス）との混乱を避けるため前者を採用した。
[2] これはイベントのウェブサイト（Fes Festival 2018）に記載されている集客数であるが、正確には外国人観光客と地元の市民を合わせた開催期間内の延べ訪問者数である。

究で博士号を取得した主催者 Faouzi Skali へのインタビューを織り交ぜたその民族誌的手法と相関している。確かに彼女が主催組織の内側からまなざした他者／スーフィストの音楽を通じた連帯活動は、この祭典を構成するグローバル・スピリチュアリティ[3]の重要な一要素である。

だが D. Justice が 2001 年の調査をふまえて提示するように、フェズ世界神聖音楽祭が包摂する宗教的・民族的連帯は、より多様かつ複雑である。Justice は多数の参加パフォーマーの特徴を大きく「1. 特定文化の表現（specific cultural appeal）」「2. コスモポリタン的価値観の表現（cosmopolitan appeal）」「3. 歴史に関する表現（historical appeal）」に区分した上で、本来理念とする宗教的寛容性に反して起きた諸問題（改宗への誘引や音楽表現の信仰的正当性をめぐる議論など）を論じている（Justice 2015）。筆者が概観するかぎり、反戦と宗教的共生を理想に発足したこの国際音楽祭はその成功とともに膨張を続けた結果、むしろグローバル社会の混沌性へ再帰する状況に至ったと考えられる。

そこで本稿は、共同研究テーマ「ホーム」を「個人／集団のアイテンディティ構築の基盤となる想念的原郷」ととらえた上で、フェズ世界神聖音楽祭を織りなす民族的・宗教的連帯の諸相を「場／空間」という物理的条件に焦点をあて、そこで様ざまに展開する共感性を含めて描き出す。D. Hayden の実践的な都市景観研究（Hayden 1997=2002）が示すように、「場／空間」との交渉を通じた文化実践は「いま・ここ」における集合記憶の構築に重要な役割を果たす。実際に筆者が 2018 年 6 月に行った同音楽祭の現地調査からも、開催地フェズの「世界一の迷宮都市」と呼ばれる構造と上演内容の関係は密接に対応していることが観察された。なかでも先行研究で捨象されているその複雑な会場配置は、アクセスの利便性に準じた「公共性」と「閉鎖性」という二極の性質とともに、身体体験としての質的記憶に大きく影響しているのである。

２．成立と展開

2-1. 起源

フェズ世界神聖音楽祭の構想は 1994 年に萌芽した。1991 年 1 月から 2 月にかけてアメリカ空軍が実行した「砂漠の嵐作戦（Operation Desert Storm）」への皮肉として、Faouzi Skali が 1994 年にモロッコ国内外の仲間たちと開催した「砂漠会議（Desert Conference）」がその始まりである。この砂漠会議は「Spiritual Memories of East and West」をテーマとし、映画作品の上映とその幕間のスーフィー音楽演奏という内容から構成された。この行事が大きな反響と熱烈な支持を受けたことから、この発展形としての国際宗教音楽祭としての提案がモロッコの地方行政機関とともに具体化した。そこで政府支援型の NGO 団体（FES-SAISS）が組織され、宗教音楽（sacred music）に特化した初の国際的イベント「フ

[3] その由来は不明ながら、グローバル・スピリチュアリティは「地球規模のスピリチュアルな連帯」を表す概念として世界的な環境保護運動や人道主義運動の広まりとともに今世紀前後より普及し、現在も自己と世界をつなぐキーワードとして多くのウェブサイトで使用されている。Curtis はこの思想をフェズ世界神聖音楽祭の核心ととらえ、論文の題目にも取り入れている（Curtis 2007）。

ェズ世界神聖音楽祭」が上記の翌年に開催された（Curtis 2007: 11）。したがってこの音楽祭の初回開催年に関しては、1994 年（e.g. Justice 2015）または 1995 年（e.g. Cook 2001）という二つの認識がある。

一連の演目構成に関して完全な情報はないものの、「初回から 7 回目（2001 年）までの間に着実な発展を遂げている」（Cook 2001: 54）、また「時を経るごとによりローカルに、よりグローバルになっていった」 （Curtis 2007: vii）といった記述からも、高度情報化社会の進化とあいまって集客数と演目数がともに増加した経緯をみることができる。毎年更新されるメッセージ性の強いイベント・テーマも一つの求心力であろう。先述した初回の「記憶」を打ち出したテーマに始まり、2001 年は「Giving Soul to Globalization」、2011 年は「Wisdom of the World」2014 年は「The Conference of the Birds」、そして 2018 年は「Ancestral Knowledge」と変遷している。これらのテーマはその当時の思潮もふまえて立案されたと推察されるが、一方で視野に含めるべきは、その発展と同時進行で様々なテロ事件が世界的に拡大していった事実である。2001 年のアメリカ同時多発テロはもとより、モロッコでも 2011 年にマラケシュ中心部で爆破テロが発生した。神聖音楽祭という平和主義が光を強めるとともに、現実社会の闇は深さを増している。

2-2. 波及

宗教音楽を通じたグローバルな連帯という新たな理念を実現化したフェズ世界神聖音楽祭は、他の国々へも波及した。現在定期開催されている同種の行事は、成立年順に以下の通りである。

開始年	名称	開催地	情報源
1998-	Québec International Sacred Music Festival	Québec: Canada	https://www.quebecregion.com/en/businesses/special-events/quebec-international-sacred-music-festival/
1999-	World Festival of Sacred Music	Los Angeles: USA	http://www.festivalofsacredmusic.org/about-us/
1999-	Michigan Festival of Sacred Music	Kalamazoo: USA	http://mfsm.us/about/
2005-	The World Sacred Music Festival	Olympia: USA	https://en.wikipedia.org/wiki/World_Sacred_Music_Festival
2007-	The Beloved Festival	Portland: USA	http://electroniccolorado.com/beloved-music-festival/
2007-	World Sacred Spirit Festival	Jodhpur: India	https://www.livemint.com/Leisure/x1V-fZ5bFx7jIgZcMFwORdN/Divine-intervention-World-Sacred-Spirit-Festival.html
2011-	Sydney Sacred Music Festival	Sydney: Australia	http://www.sydneysacredmusicfestival.org/
2011-	New Orleans Sacred Music Festival	New Orleans: USA	http://www.neworleanssacredmusicfestival.org/about
2011-	Sacred Music Festival Hawaii	Hawaii: USA	https://polestargardens.org/event/sacred-music-festival-2/
2012-	Jerusalem Sacred Music Festival	Jerusalem: Israel	https://www.secrettelaviv.com/tickets/jerusalem-sacred-music-festival
2012-	Drammen Sacred Music Festival	Drammen: Norway	http://www.sacredmusicfestival.org.uk/the-team.html
2015-	Stroud Sacred Music Festival	Stroud: UK	https://www.drammen.kommune.no/Documents/Kultur,%20idrett%20og%20fritid/Interkultur-dok/program_2012.pdf
2017-	Ketevan World Sacred Music Festival	Ketevan: India	https://www.itsgoa.com/ketevan-world-sacred-music-festival/
2017-	The Festival of Sacred Music	Thiruvaiyaru: India	http://prakritifoundation.com/event/fosm2018/

表 1　定期公演化された神聖音楽祭

過去の単発的な事例も含めれば上記以外にも多数存在する。この伝播には、フェズ世界神

聖音楽祭のネットワークからの発信が少なからず影響を与えている。例えば 2002 年から Faouzi Skali が宗教問題の顧問として EU の活動に参与をはじめ、2004 年にはフェズ世界神聖音楽祭の中枢部がアメリカ合衆国の文化機関と共働で米国 17 都市の大学で「The Fes Message」の講演ツアーを実施した。この他、国際的に活躍するチベット僧も重要なアクターとしてこの現象に関係している。フェズとの具体的なつながりは不明であるが、その背後には文化人の国際的な交流があったと考えられる。1999 年成立のカリフォルニア州ロサンゼルス市の World Festival of Sacred Music は Dalai Lama の呼びかけから発足し（Haithman 1999）、1999 年と 2000 年にはその弟子 Doboom Tulku が、バンクーバー、広島、ベルリン、ケープタウンなどを開催地とした世界規模の企画を実現した（Tibet House 2017）。このような動きからも、前世紀後半から今世紀にかけて宗教音楽の復活と共有を後押しする知識人の超地域的なネットワークが形成され、神聖音楽祭という現象を拡大した。

これらは「神聖音楽」という非日常性を趣旨とするため、多かれ少なかれ観光と関わりをもつ。高額なイベント・パス（2018 年は 350 ユーロ）を販売するフェズ世界神聖音楽祭はまさにその代表例であり、2004 年の全米ツアーについてはその理想主義と資本主義的文化ツーリズムとの癒着を示唆する批評がニューヨークの新聞『The Village Voice』に掲載された（Blumenfeld 2004）。しかし筆者が他にも調査した New Orleans Sacred Music Festival の場合は、会場が観光地フレンチ・クォーターから徒歩圏内にあるものの、入場無料で観光産業との直接的な連携はない[4]。一方で Michigan Festival of Sacred Music は、デトロイト国際空港から約 200km の地点にある地方都市カラマズーを開催地とし、10 月から 11 月の約 2 カ月間の毎週末に二つ三つのミニライブが行われるスタイルである。そもそも立地的に外部からの集客は見込めないため、この上演スケジュールは主として地域住民の集いを目指すイベント方針を明確に示している。これらの傍流は地域ごとの必要性に応じた形態をとり、さらには多様な信仰を包摂する主体―いわば「中央としての〈ホーム〉」―も、フェズ神聖音楽祭のイスラーム教に対し、ニューオーリンズはヴードゥー教、ミシガンはキリスト教といったように異なりをみせている。

３．「場」の背景

3-1. フェズという場所性

フェズがこの国際的イベントの開催地となった背景には、主催者 Faouzi Skali の出身地という理由に加え、その地理的歴史的な場所性が深く関わっている。そもそもモロッコ王国は北アフリカの西端に位置し、アラブ世界とアフリカ文化、そして地中海文化の交差点として知られる。フェズは首都カサブランカから北西へ直線距離約 250km の地点にある、古く

[4]複数の場所が会場となるフェズやミシガンの事例と異なり、ニューオーリンズの神聖音楽祭はフレンチ・クォーターの北外れに位置する New Orleans Healing Center という比較的小規模の個人所有施設のみで行われる。ニューオーリンズは 2005 年に大型ハリケーンの甚大な被害を受け、復旧に 5 年以上もの期間を要した。この背景のなかで神聖音楽祭は開始したが、開催日に小さな出店が少数並ぶものの、商業主義的な意図はさほど感じられない。むしろ入場無料ながらも地元出身の大物ジャズ・シンガーが手弁当でゲスト参加するなど、地縁的なつながりの復活が重要視されている。

から交易拠点として栄えた地方都市である。米山俊直の説明を参照すると、フェズは 789 年にアラブから逃れてきた Moulay Idriss 一世とその後継者が、先住民ベルベル人の保護とともにつくりあげたモロッコ最初の首都である。その後フェズはスペインのコルドバやチュニジアのカイラワーンからの移住者を受け入れ、フェズ川（**図 1** 参照）を境目に右岸はベルベル人やスペイン系移民が住むアンダルース地区、左岸はチュニジア系移民が住むカラウィン地区というようにそれぞれのコミュニティが形成された。これが現在メディナとよばれる、城壁に囲まれたフェズ旧市街の原型である。こうしてメディナは小さな都市空間として、先住民や移民たちの交わりとともに精緻な文化を発展させた。多様な文化が堆積したフェズという都市は、いまだ多くのモロッコ人（特に知識人）にとって精神的な故郷であり、文化的アイデンティティのよりどころになっているという（米山 1996 18-23）。

ただし、その都市的性格の拡張にも言及する必要がある。旧市街メディナ（Fès El Bali）の外部には、13 世紀に形成されたユダヤ人居住区メッラー（Mellah）を含む「フェス・ジャディッド （Fès Jdid）」（ただしメッラーのユダヤ系住民は戦後に著しく現象）、モロッコがフランス保護領となってから 1916 年にフランス人居住区として作られた現在の新市街「ヴィル・ヌヴェル （Ville Nouvelle）」、そして同じく近代に作られたモロッコ人民衆の町「シテ・ポピュレール（Cité Populaire）」、さらにこれら周辺をとりまく高級住宅地や貧困層のバラック街が存在する。

近年におけるフェズの都市化は、旧市街メディナが「世界一の迷宮都市」として 1981 年にユネスコ世界遺産に登録され、世界的な観光地となったことも大きな拍車をかけた。しかしこの飛躍を一転させたのが、湾岸戦争である。米山も叙述するように、1989 年の訪問時にはヨーロッパからの観光客でにぎわっていたメディナが、湾岸戦争開始後の治安悪化や米国政府による米国人の総引き揚げで、1991 年初旬には外国人が殆どいない状態となった。その余波は 1991 年 9 月の訪問時にも続いていたという（ibid: 24）。1994 年開始のフェズ世界神聖音楽祭は、90 年代初頭を突如包み込んだ闇のなかで、世界とのかかわりへの希望、いわばこの旧都の過去と未来の双方を照らす光を求めて出現した祭りである。

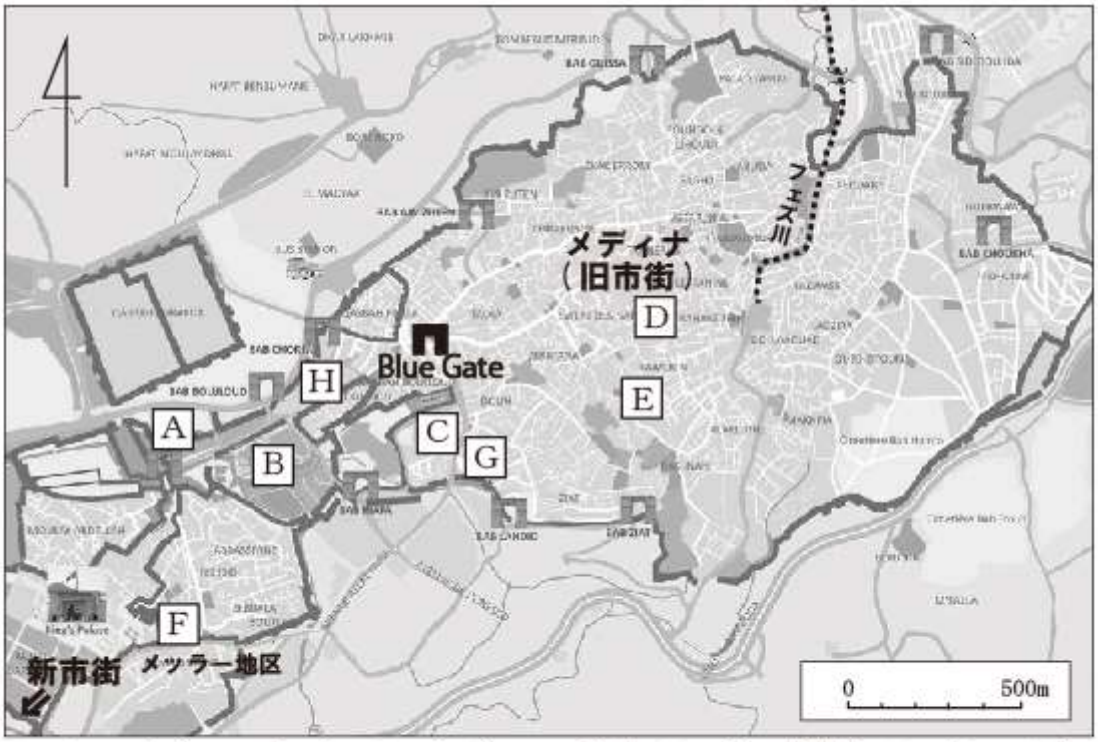
3-2. 復興計画のなかの会場設定

一方で重要なのは、1994 年のフェズ世界神聖音楽祭の立ち上げが旧市街の歴史遺産復旧計画と連携して進められた点である。**図 1** では 2018 年の会場配置を示したが、これは一連の復旧計画の進展を経て形成された「場のパフォーマンス」である。

H. Radoine が報告するように、旧市街の復旧計画は 1981 年のユネスコ世界遺産登録を機に発案され、1989 年のフェズ旧市街保全復興委員会「ADER-Fès （l'Angence pour la Defensification et le Rehabilitation de la Media de Fès）」の設立とともに具体化された（Radoine 2003: 462-463）。現在も ADR-Fès がこの音楽祭のパートナー機関である事実からも、二つの組織はフェズ再生の両輪として「空間と行為」の有機的関係の再構築を推進してきたといえる。

この背景とともに同祭典のメイン会場に選ばれたのが、旧市街と新市街の交接点に位置するアル・バブ・マッキーナ（Al Bab Makina／**図 1：A**）である。四方を城壁に囲まれたこの広場は、1886 年に当時の王 Moulay Hassan（1836-1894）が招聘したイタリアの使節

団によって武器製造の作業場として建設された。この南東に位置するブージュルー庭園



A：アル・バブ・マッキーナ　B：ブージュルー庭園　C：バトハ博物館　D：ダル・アデル
E：ベン・ユスフ文化センター　F：シナゴーグ　G：ダル・タジ　H：ブージュルー広場

図１　フェズ神聖音楽祭の会場配置

（Jardin Jnan Sbil／**図１：B**）は、18 世紀に Moulay Adbellah 王（1710-1790）によって造られ、19 世紀に上記の王が整備を加えて市民に開放した公園である。多種多様の植物で演出されたシンメトリックな空間構造は、瀟洒なフランス庭園に似た雰囲気をたたえる。シンポジウム会場に使われるバトハ博物館（Dar Batha Museum／**図１：C**）も、前出の Moulay Hassan 王が 19 世紀に建設したアラブ＝アンダルシア様式の別邸で、フランス領時代の 1915 年に博物館として改修された。その他の小会場ダル・アデル（Dar Adyel／**図１：D**）とベン・ユスフ文化センター（Ben Youssef Cultural Center／**図１：E**）は、ともに Moulay Adbellah 王が 18 世紀に邸宅として建設したものである。これらはフェズ観光の結界にあたるブージュルー門（通称 Blue Gate）を入った先に広がる、「世界一の迷宮」の名のとおり複雑きわまりない構造をした旧市街内部の片隅に位置する。いずれも ADER- Fès の主導で改修され、前者（**D**）はアンダルシア音楽の学習の場として、後者（**E**）は多目的文化施設として利用されている。これらの対極の方位にあるユダヤ教会シナゴーグ（Ibn Danan Sinagougue／**図１：F**）は、その属性に相応しく旧ユダヤ人街メッラー地区に存在する。このシナゴーグは 17 世紀にユダヤ教徒によって建設されたものの、戦後のユダヤ系住民の海外移住（イスラエルや欧米諸国）によってほぼ形骸化した。だが 1996 年にユネスコの保護対象に認定されたことを受け、1998 年からユダヤ系ネットワークの国際的 NGO が主体となってこの復旧プロジェクトを行った。開催期間の連夜 11 時から行われるスーフィー・ナイト会場のダル・タジ（Dar Tazi／**図１：G**）は、フランス領時代の 1914 年から

独立を達成する 1956 年まで利用されていた、総領事の邸宅である。スーフィー・ナイトは邸宅内ではなくその庭で行われる。そして無料ライブ会場となるブージュルー広場（Boujloud Square／**図 1：H**）は、ブージュルー門から庭園に至るまでの公共空間として、いつも露天商や地元住民で賑わいをみせている。

興味深いことに、フェズ旧市街の原点は 8 世紀末に遡るものの、上記の会場はいずれもモロッコが欧米諸国に対して鎖国政策をとった 1792 年から 1856 年の時代の「以前=大航海時代末期」と「以後=帝国主義時代」に造営されている。つまり、旧市街復旧計画と神聖音楽祭の双方が見出したフェズの価値ある歴史空間とは、諸外国との駆け引きのなかで生成した、一種のコンタクト・ゾーンなのである。実際のところ鎖国時代に誕生した価値ある建築は存在しないのか、あるいは捨象されたのか、現段階では判断できない。確かなことは、過去の異文化との交渉から生まれたこれらの空間がグローバリズムの文脈に取り込まれ、神聖音楽祭の実践や参加を通じて歴史的記憶を編み直す場となっていることである。

４．音楽、場、共感

4-1. 演目と場の共感性

2018 年のフェズ世界神聖音楽祭は「Ancestral Knowledge （祖先の知恵）」というテーマのもと、6 月 22 日から 30 日にかけて実施された。**表 2** では、そのうち有料のステージ公演である合計 25 演目の内訳を示した （イベント・パス購入者は自由鑑賞可）。

初日は王族の出席する壮大な開会式で幕を開け、続いてモロッコを中心とするアフリカのイスラーム音楽と詩の合奏（①）が上演された。そして最終日は南アフリカの有名なゴスペル・グループ「Saweto」の豪華なパフォーマンス（㉕）でしめくくられた。表に記載された以外にも、毎晩 11 時から行われるスーフィー・ナイト（**会場：図 1：G**）や、バトハ博物館（**図 1：G**）でのフォーラム（6 月 23～25 日）と有料ワークショップ（6 月 26～29 日）も恒例行事として含まれる。また、プログラムには掲載されていないが、城壁前のブージュルー広場（**図 1：H**）ではモロカン・ポップスの無料ライブが連夜行われ、地元住民で賑わっていた。

ステージ公演の演目数に関しては、17 グループから構成されていた 2001 年の行事と比較すると（Justice 2015: 2842）、2018 年まで着実に増加していることが分かる。ただし地域的区分としてはモロッコを中心としたアフリカおよび南欧のネットワークが最も多く、次いで中東、そしてアジアやアメリカが周辺を取り巻くという構図に変わりはない。信仰的分類はイスラーム教が圧倒的多数を占める点で共通するものの、複数の信仰を包摂した複合形が 2001 年には 1 件であったのに対し 2018 年には 6 件と、全演目数との割合においても大幅に増えている。

図 1 が示す会場の立地は、次より述べる各演目の内容との関連性とともに一定の傾向を示している。筆者は現地での観察から、これらはパフォーマーと観客をむすぶ共感性の規模と質に対応していると考える。山崎広光は個と社会を切り結ぶ「共感を可能にする空間」と「共感が可能にする空間」との相克に触れているが（山崎 2009: 17-18）、この視座はフェズ世界神聖音楽祭の営みを解釈する上でも有効である。25 の演目はいわば「共感の実現性」

を基準に、まずフェズという象徴的な場を目指してそれぞれの主体によって計画され、採用

No.	月日	テーマ	出身地	信仰	回数	上演会場
①	6/22	イスラーム音楽と詩	モロッコ他	イスラーム教	1	図1:A
②	6/23	南米の古典教会音楽	ボリビア	キリスト教	2	図1:B
③	6/23	アラブ音楽のジャズ融合	チュニジア	複合	1	図1:A
④	6/24	中世ヨーロッパ宗教音楽	イタリア	キリスト教	1	図1:B
⑤	6/24	中世ムスリム探検家の追想	モロッコ	イスラーム教	1	図1:A
⑥	6/25	難民による伝統音楽合奏	アフガニスタン他	イスラーム教	1	図1:B
⑦	6/25	ジプシーの歌と踊り	スペイン	伝統信仰	1	図1:D
⑧	6/25	ヒンドゥスターニー音楽	パキスタン	イスラーム教	1	図1:E
⑨	6/25	ラジャスタン音楽	インド	ヒンドゥー教	1	図1:E
⑩	6/25	フラメンコ歌唱	スペイン	伝統信仰	1	図1:D
⑪	6/26	イラン古典音楽	イラン	イスラーム教	1	図1:B
⑫	6/26	ユダヤ系モロッコ音楽	モロッコ	ユダヤ教	2	図1:F
⑬	6/26	ギリシャ正教会の音楽	ギリシャ	キリスト教	1	図1:D
⑭	6/26	アフリカ弦楽器の合奏	モロッコ、マリ他	複合	1	図1:A
⑮	6/26	北アフリカのガスパ音楽	モロッコ他	イスラーム教	1	図1:D
⑯	6/26	バリ島の伝統舞踊	インドネシア	ヒンドゥー教	2	図1:E
⑰	6/27	アブラハム信仰の詩と音楽	アメリカ他	複合	1	図1:D
⑱	6/27	アラブ系アンダルシア音楽	スペイン	イスラーム教	1	図1:A
⑲	6/28	インド音楽と教会音楽の合奏	インド他	複合	1	図1:B
⑳	6/28	地中海ユダヤ移民の音楽	モロッコ	ユダヤ教	2	図1:F
㉑	6/28	アフリカのスーフィー音楽	モロッコ他	イスラーム教	1	図1:A
㉒	6/29	シリアの古代キリスト教音楽	シリア他	キリスト教	1	図1:D
㉓	6/29	バルカン音楽の合奏	セルビア他	複合	1	図1:A
㉔	6/30	ブリタニー地方の音楽	フランス	伝統信仰	1	図1:B
㉕	6/30	ゴスペル・ソング	南アフリカ	複合	1	図1:A

表２　2018 年フェズ世界神聖音楽祭の演目構成（有料のステージ公演のみ）

後には各内容に応じた特定の場が与えられる。こうして準備された各会場を観客はプログラムを参照しつつ自身の望む空間を求めて取捨選択し、移動する。そして最終的にそれぞれの空間では、音楽を媒体とした一体感あるいは違和感などといった多様なグラデーションの情動が展開する。こうしたずれの要素（あるいは共感の実体性の問題）を含め、総じてこの音楽祭の根幹にあるものは、迷宮に残存する歴史的痕跡、主催者の思惑、表現者や観客の理想など、場と人がそれぞれに働きかける「共感への意志」であるといってよい。

だが、特にその表現内容が特定の信仰ないし民族を表象する場合、その出自を共有する観衆と表現者との間に陶酔的な一体感がおきたとしても、それは山崎が定義するところの「共

感を可能にする空間」の再生産に過ぎない（ibid: 24-25）。むしろ湾岸戦争への反動から生まれたこの平和行事の理念とは、多様な信仰音楽と身体との交響を通じて参加者たちに「自己の外へと出て他者へと向かわせる新たな地平」、すなわち「共感が可能にする空間」を開いてゆくこと（ibid）なのである。ただし実際にこの音楽祭に祝祭的なエネルギーを与えているのは、これら相反する共感性のベクトルのせめぎあいであろう。そしてこの両義的な力を一定の秩序で統御する重要な装置の一つが、場であると考える。

ここで同じく重要なのが、観衆である。350 ユーロのイベント・パスからも観衆の大半はヨーロッパからの観光客で占められ、その多くは裕福な高齢者である。観察する限りアジアやサハラ以南のアフリカからの観光客はきわめて少ない。ヨーロッパ人観光客の次に多いのがモロッコ人であるが、これに関してはアル・バブ・マッキーナなどの有料ライブに着飾って集う富裕層と、ダル・タジやブージュルー広場での無料ライブに来る一般民衆に二分される。演目と場の関係は、こうした観衆の構成を反映している。

以上をふまえて特に筆者が着目するのは、「公共性」と「閉鎖性」という二つのカテゴリーに区分しうる各会場の属性である。この区分は立地なアクセスの利便性に加え、その場での営みが公に認知される環境にあるか否かという視点も含まれる。例えば公共空間に属するものとして分類した各会場は、チケット購入者のみ入場できるものと一般に開かれた無料のものがある。しかしいずれの場合も公道に面した立地性から、それらの活動は入口の警備員や行列、また会場から響き渡る音響を通じて誰もがその存在を必然的に認知する。一方で閉鎖空間に属する会場は、袋小路のなかの立地性と密室的な空間構造によって、内々で営まれる秘儀に似た雰囲気をもつ。こうした場そのものの伝達性を念頭におきながら、次より筆者の体験をもとにこれらの空間で展開する共感の諸相をみてみよう。

4-2. 公共空間でのつながり

筆者が公共空間として区分するエリアは、旧市街と新市街をむすぶ中間領域である。この領域は数本の公道が通っているため、車でのアクセスが可能である。ここに位置する会場は**図１**の「Ａ．アル・バブ・マッキーナ」「Ｂ．ブージュルー庭園」「Ｃ．バトハ博物館」「Ｇ．ダル・タジ」「Ｈ．ブージュルー広場」の 5 箇所である。これらの会場はそれぞれの客層に応じた演目の性格に加え、使用言語の相違（モロッコ公用語のアラビア語または準公用語の仏語）という特徴もみられる。

Ａのアル・バブ・マッキーナでは合計 8 演目が上演され、信仰の分類ではイスラーム教が 4 演目、複数の信仰を包摂した複合形が同じく 4 演目と同数である。ここはメイン会場としてシート席だけで約千人を収容可能な規模となっており、演目は全て有料である（個別チケットは A 席 50-60 ユーロ、B 席 25-30 ユーロ）。この収容規模と有料制という性格から、客層はヨーロッパ人観光客とモロッコの富裕層で占められ、司会は全てモロッコ準公用語にあたるフランス語であった。イスラーム教と複合型という二種類の演目構成も、現地と西洋の富裕層がこの空間で文化共存の理想を分かち合うという共感の成立条件に呼応しているといえる。なお、ここで留意すべきは、この会場がフェズの為政者とイタリア使節団の協働による武器製造の作業場であったという背景である。開幕式ではその記憶を再現するかのように、刀剣を携えたムスリム兵士が隊列を組むなか、舞台まで敷かれたレッドカーペット

上を来賓の王女が厳かに歩むという撮影禁止の神聖なパフォーマンスが最初に行われた。そして城壁に映し出された宇宙空間と地球のプロジェクション・マッピングが観衆を世界の始源へとタイム・トリップさせた後、幻想的なイスラームの幾何学装飾やモロッコおよびアフリカのネイティブ・アートのイメージ映像が繰り広げられた（**写真１**）。世界のなかの美しく強いイスラーム文化とアフリカ、そしてその共感が可能にする文化共存の世界――これがアル・バブ・マッキーナという空間で体現された一つの理念である。

Ｂのブージュルー庭園での全演目も有料であるが、上記とは異なった方向性をもつ。フランス庭園を思わせる上品な空間意匠と一致して、全体としてキリスト教文化と博愛主義にもとづく西洋的な嗜好で統一されていた。南米ボリビアと中世ヨーロッパの教会音楽（②⑤）（**写真２**）に加え、複合型のインド音楽と教会音楽の合奏（⑲）と、ケルト信仰を含む理由から伝統信仰に分類したフランス・ブリタニー地方の音楽も含めると、キリスト教文化に関連する内容が合計 6 演目のうち 4 演目である。残り二つのイスラーム音楽に関る演目のうち、⑥はこのイベントのために企画された、ヨーロッパに避難移住した中東出身演奏家（アフガニスタンやシリアなど）の合奏である。以上が上演されるのは、池のほとりに設置された小ステージである。正門から緑に囲まれた小路を抜けた先に会場はあり、入り口横ではカンドゥーラに身をつつんだモロッコ人男性によるミントティーの振舞いがあった。その向こうの会場空間は、さながらモネの描く風景画の世界である。司会はフランス語で行われ、客層はほぼ全てヨーロッパの紳士淑女であった。6 月のモロッコの強い日差しのなか、芝生の上の椅子に腰かけた彼らは、扇子で風をとったり、あるいは柳の下に移動して寝ころんだり、思い思いに演奏を堪能した。フランス領時代の文化観光を彷彿させる、優雅なメランコリーの世界が記憶に残る。

互いに近距離に位置するバトハ博物館（Ｃ）とダル・タジ（Ｄ）での行事は、内容と場の関係に興味深い反転性がみられた。前者は総合テーマ「祖先の知恵」に関連した学術フォーラムと、カリグラフィーや歌のワークショップといった文化教養に関わる活動（いずれも有料）が行われた。これらのプログラムや運営全体の使用言語はフランス語であり、参加者もフランス語圏からの欧米人文化関係者や研究者が殆どであった[5]。一方、ダル・タジで行われたスーフィー・ナイト（**写真３**）は、モロッコ内外のスーフィズム共同体[6]（米山 1996: 54-56）が毎晩入れ替わりで無料のスーフィー音楽（踊りは無し）を旧公邸敷地内の庭で上演するもので、ここではモロッコ公用語のアラビア語が共通言語であった。この相異なる二つの知の共同体は、バトハ博物館でのイベントが朝に、ダル・タジでのイベントが深夜に行

[5] プログラムの一部には「フォーラムはフランス語で進行されるが、希望者には英語の翻訳ヘッドフォンを貸出」と記載されているものの、会場ではそのサービスも使用者も見当たらなかった。配布資料もフランス語のみであったため、Curtis が報告する三言語（アラビア語、フランス語、英語）を全体に併用した初期のフェズ世界神聖音楽祭と比較すると、現在は構成行事ごとに言語の使い分けが明確化していることが観察される。

[6] 米山が報告するように、フェズ旧市街は昔からイスラーム神秘主義の伝統があり、住民の日常生活でも縁起直しや悪魔払いを目的とした神憑り儀礼を執り行う集団エイサワー（Aïssawa）が活躍する（米山 1996: 54-56）。旧市街にはこれ以外にも複数のスーフィー流派があり、それぞれにネットワークをもつようである。フェズ神聖音楽祭でのスーフィズムの連帯に関しては Curtis の研究（Curtis 2007）で詳しく言及されており、民間で勢力をもつ宗教ネットワークの一つとして重要な存在である。

われるというスケジュールから、太陽と月の関係にも似ている。さらに筆者の関心を引くのは、そもそもバトハ博物館が Moulay Hassan 王の別邸として、そしてダル・タジがフランス領時代の総領事の官邸として建設されたという場の背景である。踏み込んで解釈すれば、これら二つの会場での営みは、かつての政治的従属関係にあった二者が、それぞれ相手の領域へ身体的・言語的に浸食する、つまり山口昌男が一連の著作で「さかさまの世界」(e.g. 山口 1975）と称した、秩序の反転なのである。

以上に加え、プログラム非掲載ながら存在感を最大限にアピールしたイベントがある。それはブージュルー広場（H）でのモロカン・ポップス無料ライブである。地元の人気歌手が日替わりで毎晩 9 時頃から深夜 12 時頃までステージを披露したのであるが、その大音量はブルーゲートの向こうまで轟くほどであった（その音響レベルはダル・タジのスーフィー・ナイトも同等)。日没後から広場は老若男女の民衆で埋め尽くされ、当時は FIFA ワールドカップの開催時期であった関係から、モロッコ公式テーマソングの歌手 Hatim Ammor のライブ当日は夕方から追っかけ女性たちが裏門に待機するほどであった。この無料ライブが世界神聖音楽祭の収益から出されていると想定すれば、こうした地域社会への享楽共有空間の提供は、同イベントが発展の過程で見出した、内と外の調整をはかる一つの方策であろう。

4-3. 閉鎖空間への探訪

上記の各会場と正反対に、筆者が閉鎖空間として定義した三つの会場「ダル・アデル（D）」「ベン・ユスフ文化センター（E）」「シナゴーグ（F）」へのアクセスは彷徨の旅に近い。いずれも車での乗り入れが不可能な、荷物を積んだロバ一頭が通れる程度の小路が毛細血管のように入り組んだ城壁内部の奥にあり、特に前者二つは Google Map でも検索できないというハードルの高い目的地であった。旅行者が入ってくる方向すら想定困難な迷宮構造ゆえに、会場の方向を示す案内板もわずかである。したがって会場周辺はイベント・パスを首から下げた人々が、地元民に訪ねたり、旅行者同士で情報交換したりと四苦八苦しながら迷い歩く光景がみられた。まさに迷路ゲームの世界である。

こうした紆余曲折の果てに旅人を出迎えるのは、小さな扉の向こうの古びた空間である。三会場とも有料であることに加え、収容人数が 100 名前後という規模から、各会場の演目は特定の客層を反映した傾向をもつ。ダル・アデル（D）は、修復後にアンダルシア音楽の学習の場と位置付けられた背景からスペイン音楽二つ（⑦⑩）が含まれているが、他の三つ（⑬⑮⑰㉒）は地中海から中東へと連なるエリアのアブラハム信仰に関連した演目である。その比較的近距離に位置するベン・ユスフ文化センターは、上記からより東方の文化圏すなわち南アジア（⑧⑨）と東南アジア（⑯）の音楽である。そしてシナゴーグ（F）は、会場の性格に相応しいユダヤ系音楽（⑫⑳）で統一されている（**写真４**）。なおこのシナゴーグが位置するメッラー地区は、低所得者層の居住区として旅行者に治安面での注意喚起が出されている、相対的にマージナルな地域である。これと相まって筆者の訪問時にモロッコ内外の来賓がシナゴーグでの上演を参観に訪れた事情から、会場周辺は多くのセキュリティーで厳重な警戒態勢がしかれていた。

以上の会場で観察されたのは、一種の自己言及的な共感性である。例えばシナゴーグでの

上演時には、観衆のなかで演奏のリズムと一致した独特の手拍子でパフォーマンスと一体化する人々がみられた。スペイン音楽の場合、絶妙な間合いで観客から投げかけられる掛け声で場は活気づいた。こうした一定の「ノリ」の作法の出現には、聴き手の身体に埋め込まれた、ある程度共通の音楽経験や記憶が前提となる。この見地にたてば、上記の三会場は文脈的に「共感を可能にする空間」としての性格が強いといえよう。ただし当然ながら、過去への遡及を通じて新時代の多文化主義的連帯をめざす趣旨の演目（e.g. ⑰）もある他、パフォーマーと観衆の文化的関係を問わず「つながりへの期待」は音楽行為の根源的な動機である。しかし観察するかぎり、会場の場所性という差異がそれぞれの空間での共感関係を性格づけていることを指摘できる。それを反映するのは、集客の差である。いずれも会場規模や中心地からの距離は同等であるが、シナゴーグとダル・アデルは大盛況であったのに対し、ベン・ユスフ文化センターでの演目は比較的閑散としていた。つまりこの差は、モロッコ／フェズの歴史的、地理的、文化的な距離に比例しているのである。

前述のように、この三会場への接近は巡礼の行脚に近い。異邦人たちは難解な迷路と格闘しながら目的地にむかう。こうした多くの労力をかけて彼らが求めるものとは、全体を俯瞰するかぎり、未知の世界よりも、記憶のつながりである。外国人向け観光公演をそのまま持ち込んだ極東のバリ舞踊（⑯）よりも、手拍子や掛け声の作法を共有できる懐かしき音楽や、何かしら過去の交流を想起させる隣人たちの音楽なのである。そしてこの背後に、エキゾチックな他者という近代的な欲望のまなざしではなく、自己の内側への探訪から同心円状に世界とのつながりへと向かう精神的希求をみることができる。

写真１　アル・バブ・マッキーナでのイスラーム装飾のプロジェクション（2018 年著者撮影）

写真２　ブージュルー庭園での南米ボリビアのキリスト教音楽の上演　（2018 年著者撮影）

写真３　ダル・タジでのスーフィー・ナイト（2018 年著者撮影）

写真４　シナゴーグでのユダヤ系音楽の上演（2018 年著者撮影）

５．結び

象徴的にも 9.11 テロが世界を震撼させた 2001 年、フェズ世界神聖音楽祭は国際連合より「文明の対話に貢献する国際行事 12 選」の一つに認定された（Curtis 2007: 15）。平和と文化共存への理想を「神聖音楽」という至高の営みから目指すという発想において、この音楽祭は大きな歴史的意義を持つイベント革命である。しかしながら、現実の実践においては、この国際平和行事が各参加グループの表象する文化を相対的価値として一様に包摂している訳ではない。以上でみたように、モロッコ・フェズおよび旧市街の歴史的建築物に内在する「場の力」と絡みあいながら、共感の質的差異や力関係が生成されているのである。その細部に見え隠れするのは、過去の権力関係を想起させる集団間の相克や、演目の中心化／周縁化などといった、寝た子を起こすかのように両義的な競合の諸相である。この認識においてフェズ世界神聖音楽祭は、様ざまな民族の記憶が堆積・飽和する都市に根を下ろした、ヘゲモニーの再構築空間であるといえる。そしてこの要因として、M. Lilla が反動主義と呼ぶ現代の後退的精神の一相（Lilla 2016）や、最終的に反抗対象への回収と同化に帰結してしまう音楽の無力性（Phillips 2004）を指摘することもできるであろう。

だが一方、10 年以上この音楽祭の発展を牽引してきた動力として筆者が無視できないものがある。それは多数の共感共同体が一斉にポリフォニックな音環境を生みだす営み、それ自体に対する希望である。ただし、これは各実践を支える同調的な共感から広がる新たな地平というより、むしろ共感なき者同士がメディナという場に「共在すること」に見出す肯定的価値といえる。アル・バブ・マッキーナでの鑑賞を終えた観光客がブージュルー広場での地元民の盛況に傍目ながら祭りの高揚感を感じる、あるいは広場の民衆がマッキーナの城壁内から漏れる光の演出を遠巻きに楽しむなど、雑多な賑わいに満ちた共在性こそ、この催しを祝祭として体感させ、多くの再訪者を獲得した力なのではないか。実際には午前のバトハ博物館での発表を終えて疲れきったフランス人研究者が、宿泊施設の壁を突き抜けて深夜まで鳴り響く、理解不能なスーフィー歌唱に睡眠を妨げられていたかもしれない。だが、これもフェズのカオスな魅力として受け入れ、多様な層の共感空間が外貨収益で実現されている背景も含めて自身を癒すことができるなら、この空間に身をおくこと自体が一つの宗教的行為であろう。共感と共在――この二つの要素が均衡を保ちながらフェズに人を集め続けるかぎりにおいて、それは現代人がそれぞれに場と音楽体験を切り結びながら心の尊厳を回復する、「世界神聖音楽祭」という名の巡礼の旅なのである。

謝辞

本研究は上廣倫理財団の助成を受けたものです（研究題目「〈神聖音楽祭〉という現象：音楽的紐帯によるグローバル・スピリチュアリティの理想と実践」、助成期間：平成 30 年 2 月 1 日より二年間）。

参考文献

Blumenfeld, Larry

2004 "Weapons of Mass Sedition: Can a Sacred Music Festival Lure Us Away from Violence and Toward Reason?," *The Village Voice*, p. 39, New York: Village Voice.

Cook, Bruce. W.

2001 "Global Concerns and Sacred Musics in 21st Moroccan Festival," *The International Journal of Humanities and Peace* 18: 75-80.

Curtis, Maria. F.

2007 *Sound Faith:Nostalgia, Global Spirituality, and the Making of the Fes Festival of World Sacred Music*, Austin: Dissertation the University of Texas.

Hayden, Doroles

1997(2002) *The Power of Place: Urban Landscapes as Public History*, Cambridge: The MIT Press.（『場所の力――パブリック・ヒストリーとしての都市景観』、後藤春彦・佐藤敏郎訳。）

Justice, Deborah

2015 "The Festival of World Sacred Music: Creating a Destination for Tourism, Spirituality, and the Other," In Stanley D. Brunn (ed.), *The Changing World Religion Map: Sacred Places, Identities, Practices and Politics*, pp. 2833 - 2849, Berlin: Springer.

Lilla, Mark

2016 *The Shipwrecked Mind: On Political Reaction*, New York: New York Review Books.

Norra, Pierre

1984(2002) *Les Lieux de mémoire: T1. La* R*épublique*, Paris: Gallimard.（『記憶の場――フランス国民意識の文化＝社会史〈第１巻〉対立』、谷川稔監訳、岩波書店。

Phillips, Gerald. L.

2004 "CAN THERE BE "MUSIC FOR PEACE"?," *International Journal on World Peace* 21 (2)：63-73.

Radoine, Hassan

2003 "Conservation-Based Cultural, Environmental, and Economic Development: The Case of the Walled City of Fez," In Luigi Fusco Girard(ed.), *The human sustainable city: challenges and perspectives from the Habitat Agenda*, pp. 457-477, London：Routledge.

山口　昌男

1975 『道化の民俗学』、新潮社。

山崎　広光

2009 「共感と共同体――「共感の共同体」批判をめぐって」『朝日大学一般教育紀要』(35): 17-31。

米山　俊直
1996 『モロッコの迷宮都市フェス』、平凡社。

オンライン情報源

Diane Haithman 1999
Los Angeles Times: http://articles.latimes.com/1999/may/ 31/entertainment/ca-42711（2018 年 10 月 15 日閲覧）

Drammen Sacred Music Festival 2012
https://www.drammen.kommune.no/Documents/Kultur,%20idrett%20og%20fritid/Interkultur-dok/program_2012.pdf （2018 年 10 月 28 日閲覧）

Fes Festival 2018
https://fesfestival.com/2018/en/fes-et-son-festival/ （2018 年 10 月 3 日閲覧）

Jerusalem Sacred Music Festival 2018
https://www.secrettelaviv.com/tickets/ jerusalem-sacred-music-festival （2018 年 10 月 10 日閲覧）

Ketevan World Sacred Music Festival 2018
https://www.itsgoa.com/ketevan-world- sacred-music-festival/ （2018 年 10 月 22 日閲覧）

Michigan Festival of Sacred Music 2018
http://mfsm.us/about/_（2018 年 11 月 5 日閲覧）

New Orleans Sacred Music Festival 2018
http://www.neworleanssacredmusic festival.org/about （2018 年 10 月 10 日閲覧）

Sacred Music Festival Hawaii 2018
https://polestargardens.org/event/sacred -music-festival-2/ （2018 年 10 月 10 日閲覧）

Sydney Sacred Music Festival 2018
http://www.sydneysacredmusicfestival.org/ （2018 年 10 月 15 日閲覧）

The Beloved Festival 2016
http://electroniccolorado.com/beloved-music-festival/ （2018 年 10 月 23 日閲覧）

The Festival of Sacred Music 2018
http://prakritifoundation.com/event/fosm2018/（2018 年 10 月 22 日閲覧）

The World Sacred Music Festival 2018
https://en.wikipedia.org/wiki/World_Sacred_ Music_Festival （2018 年 10 月 23 日閲覧）

Tibet House 2017
http://www.tibethouse.in/content/world-festival-sacred-music- global-quest-unision（2018 年 10 月 15 日閲覧）

Stroud Sacred Music Festival 2018
http://www.sacredmusicfestival.org.uk/the- team.html （2018 年 10 月 22 日閲覧）

Quebec International Sacred Music Festival 2017
https://www.quebecregion.com/en/businesses/special-events/quebec-international-sacred-music-festival/ （2018 年 11 月 23 日閲覧）
World Festival of Sacred Music 2017
http://www.festivalofsacredmusic.org/about-us/ （2018 年 11 月 11 日閲覧）
World Sacred Spirit Festival 2015
https://www.livemint.com/Leisure/x1VfZ5bFx7jIgZcMFw0RdN/Divine-intervention-World-Sacred-Spirit-Festival.html （2018 年 10 月 15 日閲覧）

Keywords
Pacifism, Multi-culturalism, Music Festival, Space, Sympacy